

隨泉寺寺報

2004年 1月号 第401号 082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

御正忌報恩講法座

講師 住職 自修

講題 「御伝鈔のころ」



昨日こそ 年はくれしか 春霞

かすがの山に はや立ちにけり (柿本人麻呂)

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひします。穏やかな新年を迎えたと思っていたら、元旦早々小泉さんが靖国神社に参ったというニュースを聞きました。新年早々 春霞ただよう感じです。今年がどんな年になることやら・・・。

除夜の鐘撞の時に沢山の人がお参りしてくださいました。それぞれいろんな思いで、鐘を撞かれた事と思いますが、どうか安らかな一年でありますように。悲しい春の別れのようなことがないことを願っています。

としごとの はるのわかれを あはれとも

人におくるる 人ぞしりける (藤原元真)

1月の法座予定

- 1月 5日午後6時より...本部役員会
- 1月14日昼席午後1時より...御正忌報恩講法座
- 1月14日夜席午後7時半より...御正忌報恩講法座 御伝抄拝読
- 1月15日朝席午前10時より...御正忌報恩講法座 おとき
- 1月15日昼席午後1時より...報恩講法座
- 1月15日昼席午後2時より...新年互礼会
- 2月 2日午後6時より...本部役員会

非戦・平和を考える

残念なことです、ついに自衛隊がイラクに派遣されました。これまで昭和20年以来、一度も戦争に加担してこなかった日本の平和への理念も打ち壊されてしまいます。日本の憲法は世界でも例のない戦争放棄をうたったものです。戦後アメリカの占領軍によって作られたという批判もありますが、少なくとも 非戦・平和は、原爆被爆をはじめとする太平洋戦争での膨大な犠牲が骨身に染みて、戦後の日本人がみずから決意して掲げた理念でした。



だが、戦争体験者の減少とともに、平和を脅かしそうなものへの、リアリティーが薄らいだのも現実です。さらに、冷戦構造が消失するなか、湾岸戦争における国際貢献問題は、戦後平和主義が「一国平和主義」と非難・嘲笑され、非戦・平和の願いが思想的・現実的に決定的に退潮する契機となりました。

しかし未熟だとしても、非戦・平和のメッセージの発信していきたい。そこで、伝えたいのは、糾弾するだけでは平和にはつながらないということ、相手の犯している罪は、時と所が変われば、いつ私が侵していくかもしれないという自身の危うさを思うことです。親鸞聖人は『さるべき業縁が有ればいかなるふまいをもすべし』とお示しいただきました。過去を振り返ることは、未来を構想することであり、そこに教えに導かれた私の生き様があると思います。

新年互礼会

今年も例年のように新年互礼会を15日の御正忌報恩講の昼席の後、開催いたします。広い世界の中で不思議な因縁で、この広島の中野に暮らす人々、それも同じ時代に、隨泉寺の門信徒としてであった仲間です。今年一年元気でともに仏法を慶びましょう。

御礼

永代経懇志	拾五萬円	水川 準二殿	故	水川 フミヨ様	特別永代経志として
	拾五萬円	隠野 静江殿	故	水川 新一様	特別永代経志として
	拾五萬円	石丸 雄一殿	故	久保田 公子様	特別永代経志として
	拾五萬円	石丸 雄一殿	故	久保田 能勝様	特別永代経志として
	壹拾萬円	高橋 学 殿	故	高橋 定一様	特別永代経志として
	五萬円	林 律子殿	故	林 勝美様	特別永代経志として
門信徒会特別寄付	金一封	高橋 学 殿	故	高橋 定一様	香典返しとして
門信徒会特別寄付	金一封	林 律子 殿	故	林 勝美様	香典返しとして

小津安二郎の映画『晩春』と『東京物語』を見ました。

『東京物語』は尾道の風景から始まります。尾道に住む平山周吉(笠 智衆)と、とみ(東山千栄子)が、東京で暮らす子供たちの所へ旅をする話です。東京で病院を営んでいる長男夫婦(山村聡、三宅邦子)や美容院をやっている長女(杉村春子)、戦死した次男の未亡人で28才の紀子(原節子)の所に遊びに行きます。しかし子供たちはそれぞれの生活、仕事を持っており、なかなか老夫婦の面倒を見ることができません。唯一東京見物につきあってくれたのは血のつながりのない戦死した次男の未亡人紀子でした。それでも二人は元気で働いている子供たちを見て安心して東京を去ります。

しかしとみが帰りの列車の中で体調を崩し尾道に帰ってから死去します。子供たちは"母危篤"の電報で尾道に呼び戻されます。葬式の後、子供たちはそれぞれの仕事に戻っていきます。子供が成長していった家庭を持つとやがてその家庭のほうが大切になります。

『晩春』は北鎌倉の静かなたたずまいの中での、ひっそりとつつましい日常生活の物語です。婚期を逸しかけている娘を心配している父親 大学教授 曾宮周吉(笠 智衆)と、自分が嫁に行ったら父はやもめで暮らしていけるだろうかためらう娘紀子(原節子)との、互いに微妙な思いやりが描かれています。

娘を持つ父としては、いつか来る日を思い複雑な思いがしました。不思議な因縁で親子として出会った。出来るならば何時何時までも一緒に暮らして生きたい、しかしいつまでも結婚せずに手元の置いていくわけにも行かない、父親と言うものは悲しいものですね。娘が嫁いだ夜、最後の場面で一人さびしく、りんごの皮を向いているシーンは泣けてきました。

どちらの映画も家族と別れがテーマです。出会いがあれば別れも必ずあります。一人生まれて一人死んでいきます。相手を深く愛すれば愛するほど、別れはつらいものです。小津安二郎は家族の微妙な心のゆれ動きを見事に描いていますが、結局人間は一人で寂しい存在でしかありません。

別れのない出会いはありませんが、私が最後の場面を取るとしたら、静かにお仏壇の前にぬかずき、お念仏する姿を描きます。

別れは辛いものですが、いつでもどこでもともにいてくださる真実との出会いこそ、その寂しい私を生き抜かせてくださる力です。それがお念仏です。



聞くということは吸収すること

まことの「いのち」に目覚める 1月号カレンダー 東井義雄

私は長い間、教員をやってきました。私たちは、授業の一環として、話し合いという時間を設けています。しかし、私は九州から北海道まで、あちらこちらの授業を拝見させていただいて、これが本当の話し合いだというのは、ほとんど出会うことができません。言い合いなんです。そして言い合いだから討議になります。討議はやつつけ合いです。本当の話し合いというのは、じつは聞き合いなんです。

だから今の若者たちの像を漫画で書くとすれば、文句はよく言うようになったから、口は相当に大きい。大きいだけでなく、人をやつつけるような口ですから、するどくどくがって発達している。目は、よろこびやしあわせが、いっこうに見えず、見えるのは不平、不満ばかりで、飛び出した目になる。耳はどのように書けばいいかといえば、あるかないかの点ぐらい打っておけばいいのではないのでしょうか。聞くということを粗末にして、やつつけ合いを育てることが、子どもの自主性を育てることだと考え違いをしてきたようです。

私は、これが本当の聞き合いだと思いましたのは、北海道の根室のある小学校を訪れたときでした。ここは千九百人の児童数の大きな小学校ですが、一年生の教室で子どもたちが話しているのを聞くと、子どもの顔ってこんなにも美しいものかなと思うほど、輝いた顔で話している、その声が、私の声のようになっていないのです。

それはどうしてかといいますと、本当にいい顔して相手の言葉をうなずいて吸収して聞いているから、とがった声でなく、しみ込んでくるような声になっているのです。そして他の子どもがしゃべり出すと、みんなは身も心もそちらに向けて、うなずきながら聞いている、これが本当の話し合い、聞き合いなんです。

